

目次

- ・トピックス 合併した旧町村の指定文化財 2 ————— 2
- ・とよたの近代和風建築 ————— 4
- ・とよたの女性史—女流歌人 深見年之(愛子)————— 5
- ・始祖松平御参府お帰り道中—地域が歴史を創り上げる ————— 6
- ・発掘調査速報—堂外戸遺跡 ————— 7
- ・文化財シリーズ53・資料館 NEWS ————— 8

シラヒゲソウ (市指定文化財 御船町)
山間の湿地に生える多年草。
開花時期は初秋。

合併した旧町村の指定文化財②一足助地区

今回は旧足助町の文化財を紹介します。足助地区は中馬街道や飯田街道が通り、古くから街道に沿って街が発達してきました。足助八幡宮や香積寺などの遺産を中心に数多くの歴史を物語る文化財があります。

市内指定文化財数一覧表

種別	国指定	県指定	市指定	合計
工芸	3	3	22	28
絵画	4	6	15	25
彫刻	1	4	25	30
文書	0	0	9	9
書籍・典籍	3	3	3	9
考古資料	1	3	13	17
工芸技術	0	0	2	2
有形民俗文化財	0	2	17	19
無形民俗文化財	1	8	11	20
史跡	2	4	24	30
名勝	0	0	1	1
天然記念物	2	10	97	109
建造物	1	2	5	8
豊田市合計	18	45	244	307
登録文化財	7			

木造観音菩薩坐像

昌全寺 蔵 平安時代

像高151.5cm。檜材の寄木造で、ほとんど剥落して素木造りのようにみえています。像容は完形のまま残



り、豊かな頬、緩やかな弧線の眉が鼻梁でつながっている点、俯瞰の穏やかな切れ目、大きな半円を描くような眉の流れ、彫りの浅い整った衣文の線状等などの特徴をもった作風の像です。また、胎内には、平治元(1159)年10月25日の墨書銘があります。県下の在銘像としては、平泉寺(阿久比町)の阿弥陀像に次いで古く、しかも傑作であり、全国的にみてもこれだけの大きさを持ち年代の古い観音像は希少です。

扁額鉄砲的打扇板額

足助八幡宮 蔵 江戸時代



鉄砲を描いた古絵馬(扁額)の現存するものは少なく、ほかに京都蓮華王院(三十三間堂)、下総新勝寺(成田山)、東京目黒不動堂などが知られています。この絵馬は、慶長17(1612)年三河国岩神村沢田四郎右衛門奉納のもので、彼は尾州稻留流の流れをくみ、師範の位置にあったようです。的は日の丸扇的打と傍書があります。足助八幡宮の社前に的をたて、適宜の距離に銃を構えて、老翁が射撃する状景ですが、霰小紋の袴をきて、左片膝をたて、頬付、膝台打の姿勢をとっています。上部背景に松林と鳥居があるのは現在の八幡社と思われます。

「奉納」「扇的打」「慶長十七壬子年 尾州稻留流先生 當國住岩神村 澤田四郎右衛門尉行年七拾八歳」の墨書があります。

(杉浦 裕幸)

足助地区文化財一覽

種別	名称	所蔵又は管理者	指定年月日	時期	所在地	備考
彫刻	木造観音菩薩坐像	平勝寺	1937.8.25	平安末期	綾渡町奥12	像高151.5cm。胎内に、平治元年(1159)の墨書銘。県内の在銘像としては平泉寺の阿弥陀像に次いで古くしかも傑作である。
建造物	足助八幡宮本殿	足助八幡宮	1907.5.27	室町	足助町宮ノ後12	桧皮葺の三間社流造り。社伝では白鳳2(673)年創建、現在の社殿は文正元年(1466)1月の再建。
無形民俗文化財	綾渡の夜念仏と盆踊	綾渡夜念仏と盆踊り保存会	1997.12.15		綾渡町	毎年、8月10日と15日の2回、平勝寺境内で実施。盆に行われる芸能の古風な姿を伺わせる。
工芸	平勝寺扁額	平勝寺	1958.3.29	鎌倉末期	綾渡町奥12	裏面に、「元徳二年(1330)庚午八月□日書之」開山法要花押、「散位從四位下藤原朝臣行尹」と細刻。
絵画	扁額鉄砲の打図板額	足助八幡宮	1957.9.6	江戸初期	足助町宮ノ後12	鉄砲を描いた古絵馬(扁額)の現存するものは甚だ少なく、慶長17年(1612)三河国岩神村沢田四郎右衛門奉納のもの。
彫刻	木造二天立像	平勝寺	1957.9.6	平安末期	綾渡町奥12	四天王残存の二軀で、多聞天と時國天。奇木刻合わせで構成されている。足下の天邪鬼が共に荒彫りになっている点が珍しい。
彫刻	木造観世音菩薩坐像	昌全寺	1996.3.18	平安末期	五反田町ナギタ11	像高121.8cm。
考古資料	飯盛山経塚出土品	豊田市	1956.3.7	平安末期	足助町梶平25-1	秋草遊兎双雀鏡(径10.9cm)と刀子の2点。
史跡	飯盛城址	豊田市、香積寺	1961.3.30	鎌倉～戦国	足助町飯盛39-1ほか	鎌倉～南北朝期は足助氏、戦国時代は鈴木氏が居城。指定面積78,235.7㎡。城址は中世城砦の形態を保存している。
史跡	今朝平遺跡	豊田市	1980.3.28	縄文後期～晩期	足助町久戸86-1	径7.6mの環状配石など保存良好な特殊遺構と、多様な土器類が出土した縄文時代後期を代表する遺跡。
建造物	旧稲橋銀行足助支店社屋付金庫室及び同前室	豊田市	1984.2.27	大正	足助町田町11	明治末期建造の旧稲橋銀行足助支店で明治・大正初期の地方銀行社屋の典型的遺構として価値が高い。なお金庫室・同前室昭和29年増築。
無形民俗文化財	足助の棒の手	足助町棒の手保存会	1961.3.30		五反田町、近岡町、富岡町	五反田(鎌田流)近岡(見当流)豊岡(起倒流)の3地区。
天然記念物	足助のヒメハルゼミ	豊田市教育委員会	1968.12.11		岩神町香福庵63・64-65	本指定地域は、クヌギ、シラカシなど樹木がうっそうと茂り、夏も涼しい静寂境で蟬類の生息に適す。他の蟬類と違って生息地が少なく、殊に近年開発とともに、その数も少なくなっている。
工芸	鱧口	八幡神社	1978.3.25	室町	大多賀町不二平3	嘉吉2年(1442)に大田加右馬が奉納。旧足助町内で最古の鱧口である。
工芸	鱧口	八幡神社	1978.3.25	室町	御内町東切16	文明19年(1487)に四郎大夫が奉納。銘文「コンサラレ八幡御前文明十九(1477)丁未七月吉日願主四郎大夫」
工芸	鱧口	香積寺	1981.3.23	室町末期	足助町飯盛39	永禄2年(1559)に祖越が奉納。香積寺の鎮守白山神社に懸けられた。
絵画	絹本着色方便法師尊像	願永寺	1978.3.25	室町中期	実栗町久楽後13	
絵画	足助八幡宮絵馬	足助八幡宮	1981.3.23	江戸	足助町宮ノ後12	慶長19年(1614)～寛政10年(1798)に奉納された「神馬図」「白鷹図」などの絵馬12面。
絵画	僧風外作品群	香積寺	1981.3.23 2002.2.5	江戸後期	足助町飯盛39	香積寺25世僧風外本高の絵画・書など25点。
絵画	絹本着色方便法師尊像	楽園寺	1982.3.18	室町	田振町東入128	楽園寺の開山明善が文亀3年(1503)に額田郡在住のとき賜ったもの。
彫刻	木造薬師如来坐像	十王寺	1978.3.25	鎌倉末期	足助町宮平38-1	像高86cm。明治初年まで足助八幡宮境内に所在した神宮寺の本尊仏。
彫刻	鈴木正三坐像	心月院	1978.3.25	江戸前期	則定町年蔵連10	像高25.5cm。像の座部に、「石平正三和尚七十七明暦元年(1655)未六月廿五日」と朱書き。台座裏側に、「延宝九年(1679)カノトノ西五月十八日御出来御つき」と墨書。
彫刻	木造南無仏太子像	明誓寺	1981.3.23	室町	月原町上向田17	像高41cm。聖徳太子2歳の姿をあらわしたのもの。体部は薄黄色土、袴は朱に塗られている。智証大師作と伝えられる。
彫刻	木造阿弥陀如来立像	十王寺	1981.3.23	室町	足助町宮平38-1	像高92.5cm。「またたき如来」とも呼ばれ、十王寺の本尊仏。恵信(心)彌都の作と伝えるが、室町時代の前半から中頃の制作。
彫刻	木造十王像	十王寺	1981.3.23	江戸初期	足助町宮平38-1	鏡・秤などをあわせ14軀・2点を指定。閻魔像の胎内に寛永15年(1638)の墨書銘。現在、十王寺本堂内左側両面に祀られるが、本来はこの寺の前身である十王堂の本尊である。
彫刻	木造天部立像	観音寺	1993.3.22	平安後期	足助町岩崎35	四天王のうちの2像であるが、ともに両腕が後補のため、本来の名称は不明。
彫刻	木造阿弥陀如来立像	心月院	1993.3.22	鎌倉末期	則定町年蔵連10	像高39cm。旧心月院の本尊仏。鎌倉期の典型的な阿弥陀如来像で、一部に損傷はあるが、制作当時の姿をよく伝えている。
彫刻	木造阿弥陀如来坐像	浄雲寺	1997.9.3	平安末期	霧山町三軒29-1	像高113cm。二重円光の千仏光背を持つ。後期和様の特色を良く遺す。膝部背面に小さな孔があり、胎内に数多くの祈願主などの小紙片が納められている。
書跡	紙本墨書伝蓮如筆六字名号	専休寺	1982.3.18	室町	中立町小畑前12	伝本願寺8世蓮如上人筆。専休寺の名号は、比較的大きく、末尾の「仏」の字がほとんど消えているが、保存状況は良好。
典籍	足助八幡宮縁起	足助八幡宮	1982.3.18	室町	足助町宮ノ後12	足助八幡宮縁起は『続群書類従』に収録され、その内容は古くから広く知られている。縁起の成立は、南北朝時代の早い時期と思われる。特に後半部分は史料価値の高いものである。
考古資料	大屋敷遺跡出土品	豊田市	1981.3.23	縄文中期～晩期	足助町梶平25-1	大屋敷遺跡出土の(縄文土器・磨製石斧・石匕)
考古資料	今朝平遺跡出土品	豊田市	1981.3.23	縄文後期～晩期	足助町梶平25-1	今朝平遺跡出土の土偶・動物形土製品・白型耳飾り・玉類・石錘。
考古資料	植田遺跡出土品	豊田市	1997.9.3	室町	足助町梶平25-1	大正7年12月に、成瀬常雄氏の父弥一氏が耕作中に発見したもの。中国福建省付近で焼かれた15～16世紀の青磁の皿20点。
考古資料	北貝戸遺跡出土品	豊田市	2000.3.7	縄文早期	足助町梶平25-1	北貝戸遺跡(桑田和町)出土の縄文土器。
考古資料	葛沢の蓮弁文壺	豊田市	2000.3.7	平安末期	足助町梶平25-1	渾美窯の蓮弁文壺1点。「黒い壺」として知られる。昭和30年頃まで、葛沢町の林家に置いてあった。12世紀後半の渥美窯の製品。
有形民俗文化財	仏足石	宝樹院	1978.3.25	江戸末期	葛沢町中本郷56,57合地	石に仏の足跡を彫り、拝んだもの。長さ61cm、幅33cm。
有形民俗文化財	足助八幡宮田町の山車	足助町(田町)	1997.9.3		足助町岩崎	
有形民俗文化財	足助八幡宮本町の山車	足助町(本町)	1997.9.3		足助町陣屋跡	
有形民俗文化財	足助八幡宮新町の山車	足助町(新町)	1997.9.3		足助町新町21	
有形民俗文化財	足助八幡宮西町の山車	足助町(西町)	1997.9.3		足助町蔵ノ前29	
有形民俗文化財	野林の木偶付馬道具	野林町	2001.2.6	江戸後期?	野林町	足助祭りの献馬用の飾馬の馬上に乗せていた木偶で、曾我五郎時致。
有形民俗文化財	久木の木偶付馬道具	久木町	2001.2.6		久木町	足助祭りの献馬用の飾馬の馬上に乗せていた木偶で、源三位頼政。
無形文化財	足助乾漆技法	高山兼男	2001.2.6		二ツ宮町溝畑19	足助乾漆は、木型に麻布を生漆で数枚貼り合わせて成形し、漆が乾いたところで麻布を取り外す、それに色漆を数多く塗りながら研いでゆき、抹茶茶碗や壺・盆・花瓶などを作り出す技法。
無形文化財	矢の製作技法	鈴木武夫	2002.2.5		足助町落合13	現在、矢師は全国に20名不足で、貴重な技術の保持者である。
天然記念物	楽園寺のカヤ	楽園寺	1978.3.25		田振町東入128	樹齢500年(推定)樹高16m、幹周4.15m。
天然記念物	有洞のサワラ	薬師堂	1978.3.25		有洞町向洞28	樹齢1200年(伝承)樹高34m、幹周6.5m。サワラとしては、全国9番目の幹周の巨木。
天然記念物	平勝寺のスギ	平勝寺	1982.3.18		綾渡町奥12	樹齢300年(推定)樹高32m、幹周5.86m。「鐘掛杉」と呼ばれ、鐘を掛けて鳴らしたという伝説がある。
天然記念物	大日堂のスギ	大日堂	1982.3.18		岩神町仲田30・31	樹齢600年(推定)樹高30m、幹周6.55m。
天然記念物	五反田の二本スギ	八幡神社	1982.3.18		五反田町ナギタ29	樹齢600年(推定)樹高36m、幹周5.6m、樹高33m、幹周6.9mの2樹。
天然記念物	四ツ松のアカメヤナギ	四ツ松町	1983.3.25		四ツ松町神造84	樹齢300年(伝承)樹高12m、幹周3.9m。アカメヤナギとしては、県下最大。
天然記念物	田振のアベマキ	神明社	1983.3.25		田振町橋詰50-1	樹齢120年(推定)樹高35m、幹周4.9m(3本立)。アベマキとしては西三河最大。
天然記念物	足助八幡宮のイチョウ	足助八幡宮	1995.3.20		足助町宮ノ後12	樹高30m、幹周4.3m。
天然記念物	足助八幡宮のスギ	足助八幡宮	1995.3.20		足助町宮ノ後12	樹齢500年(推定)樹高41m、幹周6.8m。
天然記念物	岩谷のツガ	安勝院	1997.9.3		岩谷町堂ノ下13	樹齢400年(推定)樹高25m、幹周3.98m。
天然記念物	山中若宮神社のカシの群生	若宮神社	1997.9.3		上八木町坂5ほか	シラカシ1樹、アラカシ7樹、ウラジロガシ4樹の12樹。暖帯にあるカシ類の群生としては、北限に近いもの。
天然記念物	専蔵寺のツバキの生け垣	専蔵寺	1997.9.3		栃本町日面38	生け垣として植えられる。
天然記念物	専休寺のイブキ	専休寺	2000.3.7		中立町小畑前12	樹齢150年(推定)樹高14.5m、幹周2.03mと樹高13.5m、幹周1.67mの2樹。
登録文化財	伊世賀美隧道	豊田市	2000.9.26	明治	明川町岩立	明治30年(1897)竣工。長さ308m、幅約3mの総花崗岩積みで、トンネル。伊那谷と三河を結ぶ物資輸送のための重要なトンネルとなった。

とよたの近代和風建築

— 近代和風建築総合調査1次調査から —

近代和風建築とは、その名称が示すとおり、近代に建てられた「和風」の建築物のことです。近代とは、一般的には明治から昭和初期・第2次世界大戦敗戦までを指します。「和風」については、一般的に「西洋風」に対比される、伝統的技法や様式によって建てられたという意味で捉えられています。そして建築物の種類としては、住宅や旅館、駅舎や庁舎などの公共建築、寺社建築などが挙げられます。

平成17・18年度の2年間で、愛知県教育委員会が事業主体となり、「愛知県近代和風建築総合調査」が実施されます。豊田市郷土資料館ではこの調査に協力し、その第1次調査として旧豊田市内の近代和風建築の調査を行いました(旧町村域は各支所に調査を依頼)。その結果、現在の市域において約360の物件を抽出することができました。想像以上に多くの近代(和風)建築が残されていることがわかったことは大きな収穫でしたが、調査期間や人員等に大きな制約があり、十分な内容の調査が行えたとはいえません。しかし、豊田地域の建築をこれまでと違った視点で眺めることによって、建築から見た市域の特性を垣間見ることができました。

山地から平野部にまたがっている豊田市域は、大きくは行政の支所単位、小さくは字単位において、その環境や歩んできた歴史、背景となる文化が異なります。そして当然ながらその各地域によって建築にも差異があり、地域が異なれば、一般的に同じように見える農家住宅においても異なる印象を受けます。その逆を言えば、建築物の違いから各地域の違いを抽出する可能性も見えてきます。また、高岡地区における農協等の公共的建築物に見られる意匠の共通性や、挙母地区の中心市街地や足助地区の建築における洋風と和風の様式の折衷など、建築を通じた各地域の特性を知る手がかりにもなります。

その他、おそらくはそれを建てた施主や大工個人の「好み」、またはその時代の流行を反映した意匠も多様で、ひとつの「作品」として建築物を鑑賞することも可能です。その視点からも興味深い事例がありました。



近代和風建築の例(個人住宅・百々町地内)



近代和風建築の例(寺社建築・神明町地内)



近代和風建築の例(公共建築・喜多町地内)

近代の建築物は、近世以前のそれと比較すると、保存に関して恵まれた環境にあるとはいえませんが、そこには確かに地域や個人に関する「モノ」語りがあります。今後貴重な文化財として、近代の建築物が見直されることを願っています。

なお、今回の調査には各地区の住民や所有者など多くの方々のご協力を頂きました。末尾ながら心よりお礼申し上げます。
(天野 博之)

深見年之・ふかみとしの

深見年之は、堤村、現在の豊田市高岡町に天保4年(1833)1月14日に村上忠順(むらかみただまさ)の長女として生まれました。年之・年野・登之能・登之野などと表記されます。また明治維新以降は愛子という名を使っていたようです。

父の村上忠順(1812~1884)は、家業である刈谷藩の藩医をつとめました。また、国学者・歌人としても有名で、京都や江戸で活躍する知識人と多くの交流・交遊を行っています。

忠順の「門人録」には159人の名が記され、堤村周辺を初め遠くは江戸、伊勢の門人もいました。

村上家の子女たち

こうした環境で、年之をはじめ忠順のこどもたち(成人した子は二男三女)は幼い頃から和歌に親しみ、書に励んでいたのでしょう。村上家文書には、こどもたちの手習いの書と思われる資料も多くのごさされています。当時、女性にとって和歌や書は教養の一つでした。和歌は季節の移ろいの中に、個人の感性を読み込む文学であり、その評価は性差によって決まるものではありません。京都で活躍する女流歌人の才能を目の当たりにしている忠順にとって、女性であっても和歌や書の能力を伸ばしていくことは、親としても教育者としても楽しみなことであったにちがいません。



「年之女雑記」(村上家文書)

慶応2年に出された『参河歌集』には年之、妹の小鈴、八千代、そして忠順の母、妻の歌も知られ、村上家の人びとは皆よき師の下で歌をよくしたことがわかります。

年之は、新堀村(現在の岡崎市新堀町)の深見友三郎篤慶と結婚します。嘉永5年(1852)のことと思われます(「年之女雑記」による)。新堀村の深見家は三河木

綿の間屋・買次商として江戸時代中期~幕末にかけて江戸でも商売を行う豪商でした。寛政~天保期に活躍した深見佐兵衛家の佐太郎(朝倉三笑)は、狂歌で有名で新堀村には狂歌連もありました。こうした家柄と東海道筋に近いこともあり、深見家は文化的な環境にも恵まれていたといえます。村上家文書「年之女雑記」嘉永4年9月の記録によると年之の夫となった篤慶は、阿野村出身で嘉永4年に深見家の養子となり、養子の話と同時に年之との結婚の話が決まっていたようです。養父である深見藤十は刈谷藩御用達の商人であったため、このような縁が生れたのでしょうか。その後、深見篤慶は、忠順の門人としてその才覚をあらわしていき、忠順を学問的にも財政的にも支える存在となっていきました。篤慶には「山室山日記」「松塙集」などがある他、忠順の著書「散木弃詞集標註」の校読者となっています。

深見年之の作品

年之の歌は、『参河歌集』(慶応2年)「四拾二番歌合」(慶応2年)にあります。『葉桜日記』に多くの作品を見ることができます。『葉桜日記』は、文久元年(1861)3月21日~4月16日まで京都・奈良を旅し伊勢を経て帰郷した際の日記です。同行した夫・篤慶も『文久日記』として紀行文を残しています。

年之の歌をみてみましょう。

「よし花八散はてぬともとくゆきて

嵐の山の葉桜をミむ」

「わけ来つる山は霞に立こめて

ふるさと遠くなりけるかな」

「をとめらも藤さくころ八むらさきの

雲のう八ぎをかさねてぞきる」

女性らしい視点の歌が、27点掲載されています。

年之は、明治維新以降、夫の仕事の関係からでしょうか京都、東京と移り住んだ様子で、東京から村上家に宛てた書簡が多くあります。東京では和歌の添削をしたといい、また明治維新期の歴史を調査した「史談会」にて父・忠順の事蹟についての講演を行っており(『史談会速記録』第137輯~146輯)、父・忠順の顕彰に果たした役割も大きいといえます。

※参照「村上忠順とその周辺」築瀬一雄著 村上忠順翁顕彰会

(伊藤 智子)

地域が歴史を創り上げる

徳川家の本家にあたる松平太郎左衛門家の江戸時代の参勤交代を現代に再現する「始祖松平御参府お帰り道中」が、8月10日から21日までの日程で行われました。

東京から松平郷まで374kmを12日間かけて歩きとおすこの道中は、全行程を踏破する一般公募6名の殿様一行と、日替わりで参加する松平高校・松平中学の生徒、一般参加者からなり、沿道の各市町に豊田市の歴史文化を広めることが目的でした。

芝増上寺で行われた出発式には徳川宗家18代当主徳川恒孝(つねなり)さん、松平太郎左衛門家24代当主松平弘久(ひろひさ)さんに加え、俳優の松平健さんも出席。豊田市が未永く発展することを願う旨の書状を授かった殿様一行は、故郷松平に向けて歩き出しました。



最初に訪れた難関は箱根の峠越え。一般道と急な山道が交互に現れ一行を苦しめます。夕方には雨にもたたられましたが、全員無事宿に着くことができました。「当時の人は整備もされていない道を進み、この道中を7泊8日で終えたことを考えると、いかに御参府が大変だったかがわかります。」先導役を務める中川さんはいいます。

それでも旅の疲れを癒してくれる瞬間が、沿道の方たちからの暖かい声援。「がんばって」の一言が励み

になります。

21日、全行程を歩きとおし、松平郷へ戻ってきた一行。出迎える人々



の手に、老人クラブが作った小旗がゆれ、到着式の会場では松平コミュニティが歓迎の催しを用意しています。あいにくの天気ではありましたが、800人もの出迎えを受けて一行は無事帰郷を果たしました。

合併で地域意識の低下がさげられる中、松平地区がお帰り道中を行ったことには大きな意味がありました。「豊田の歴史文化発信」を掲げて、はるばる東京から歩いて来たのですが、地域づくり、人づくりといったことにも貢献できたと思います。旅は終わりを告げても、地域やそこに根付く歴史はずっと続いていきます。みなさんの地区にとっても、この道中が何かの参考になればと思います。





どうたくん

発掘調査速報



すえちゃん

○ 堂外戸遺跡(市木町堂外戸)

今回の調査区は、前年度の調査で古墳時代中期の独立棟持柱付建物が見つかり話題となった場所の西側にあたります。4月13日から7月29日にかけて2,490㎡の調査を完了し、8月に航空写真測量・補足調査等を行いました。

建物としては、竪穴建物12棟・掘立柱建物15棟を調査しました。竪穴建物は6世紀初頭から後葉にかけて営まれたもので、前年度調査区の竪穴建物(5世紀～6世紀前葉)に後続する時期の建物群です。うち、5棟は床面に間仕切り溝を持ち、屋内空間を区画する施設が設けられていたことが想定できます。堂外戸遺跡では、これまでに調査された5・6世紀の竪穴建物27棟のうち10棟が仕切り溝を有していることとなります。周辺地域では類を見ない高率であり、このムラの大きな特徴といえます。また、6世紀前葉の竪穴建物の中には、この時期としては珍しく、1辺9mという大型の建物もあります。

掘立柱建物は、側柱建物3棟と2間×2間の総柱建物12棟があります。後者は、前年度の調査分を含めると合計16棟になりました。時期認定が困難なもの、土層の観察から6世紀中葉の竪穴住居より古いことがわかる建物もあります。このタイプの建物が、何の用

途に使われていたのか、大変興味深いところです。

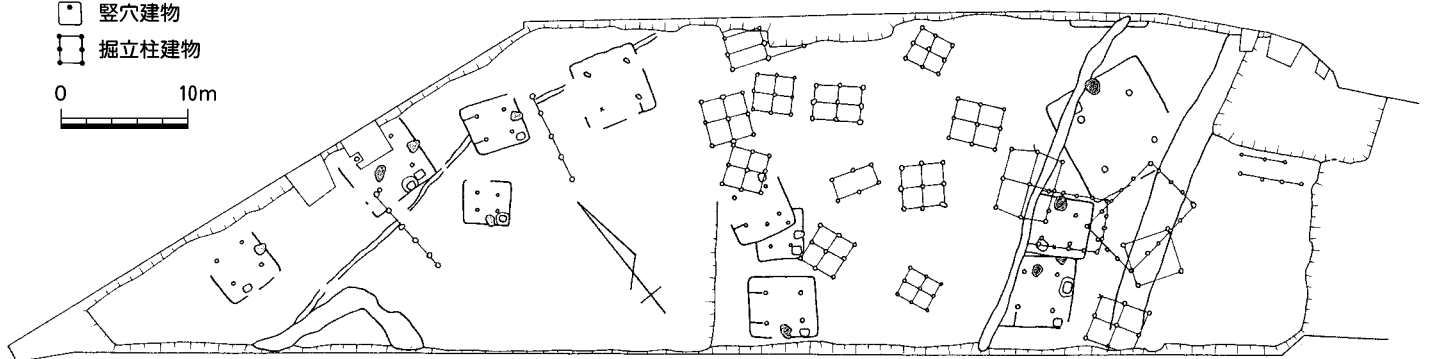
一方、今回は独立棟持柱付建物は見つからず、その特殊性がより明らかになったと言えそうです。前年度の調査では、独立棟持柱付建物を外界から遮る役目を果たす塀や垣根の基礎と思われる溝を検出しました。今回も、調査区西側を斜めに横切る同様の溝を調査していますが、その関連は不明です。

6世紀後葉まで継続し、かつ2×2間の総柱建物を数多く伴う集落は、これまで県内では類例がありません。9月から取りかかる南側の調査区の成果を待って、再び遺跡の性格を考えてみたいと思います。



発掘現場の航空写真

□ 竪穴建物
□ 掘立柱建物
0 10m



主要遺構の平面図 (scale:1/600)

訂正とお詫び

本紙 NO51号(平成17年3月18日発行)の5ページに誤記がありましたので、下記のとおり訂正しお詫びします。

右段1行目以下、①瑞華院秀譽儀同貞節大姉を①瑞華院秀譽儀芳貞岳大姉に、②豊膳院殿貯譽徳法堂楽居士を②豊膳院殿貯譽徳法常楽居士に、③法漫院教譽妙月了澄大姉を③法漫院殿観譽妙月了澄大姉に、④法玉院殿稚含幻夢大童子を④法玉院殿稚荅幻夢大童子に、⑤見生院殿曉譽幻相大童子を⑤見生院殿曉譽幻相大童子に訂正します。

(松井孝宗)

豊田大塚古墳出土の装飾須恵器を中心とした一括資料です。豊田大塚古墳(県指定史跡)は矢作川西岸の挙母台地端に立地する径約30m、高さ3.5mの円墳で、横穴式石室内から須恵器・金属製品・玉類などの副葬品が出土しています。

文化財シリーズ

装飾須恵器は、6世紀を中心に東海地方から西日本を中心に分布してい



ます。装飾須恵器は台付壺が圧倒的に多く、器台がそれに次いでいます。これらの器は古墳の横穴式石室に置かれたものが多く、地域の中での有力豪族層の葬送用・副葬用として古墳に埋置されたものと考えられています。

装飾須恵器は台付四連坏3点・台付四連壺1点・台付壺3点があり、これに須恵器の壺・長頸壺・提瓶・はそう・坏・蓋が加わります。これらは6世紀前半のもので、出土状態が明らかで、状態もよく、装飾須恵

器を含む古墳出土の須恵器の代表的な例として高い学術的価値があります。このほかに金具や馬具類・鉄製太刀・刀子、勾玉・管玉などの玉類、土師器、紡錘車、用途不明の多孔円筒器1点が出土しています。



資料館NEWS

特別展「鈴木正三ーその人と心ー」

6月25日～8月7日の会期で特別展「鈴木正三ーその人と心ー」を開催しました。2,186名の入館者があり、シンポジウムや史跡見学なども併せて開催しました。多くの方のご来館・ご参加ありがとうございました。

夏休み子ども週間

「すずきしょうさんーその人と心ー」クイズラリー
「まがたま作り・土偶作り」

小学生250人と保護者65人と多数の方の参加があり、夏休みのひとときをなごやかに過ごしていただきました。

博物館実習

本年は大学生12名が9月8日～16日に実習を行い、博物館の学芸員としての各種の仕事のレクチュアを受け、資料の受入・台帳作成・展示などの実務を経験しました。

新たに登録された文化財

浄照寺(若林西町)の本堂・庫裏・書院が登録有形文化財(建築物)として登録されました。



利用案内

開館時間 9:00～17:00
休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始
入場料 無料(特別展開催中は有料)
交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩15分
駐車場 約20台(無料)

■豊田市郷土資料館だより No.53■

平成17年10月31日発行
編集・発行 豊田市郷土資料館
〒471-0079 豊田市陣中町1-21
☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095
E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL: http://www.toyota-rekihaku.com
※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。